大聖歓喜天

霊験経和訓畣會

中

ハ4
2763
2

波 1808 3-2
ハ 2763 2

大聖觀喜天靈驗經和訓圖會巻之中

洛東　春屋織月齋棋翁謹述

我使國王召

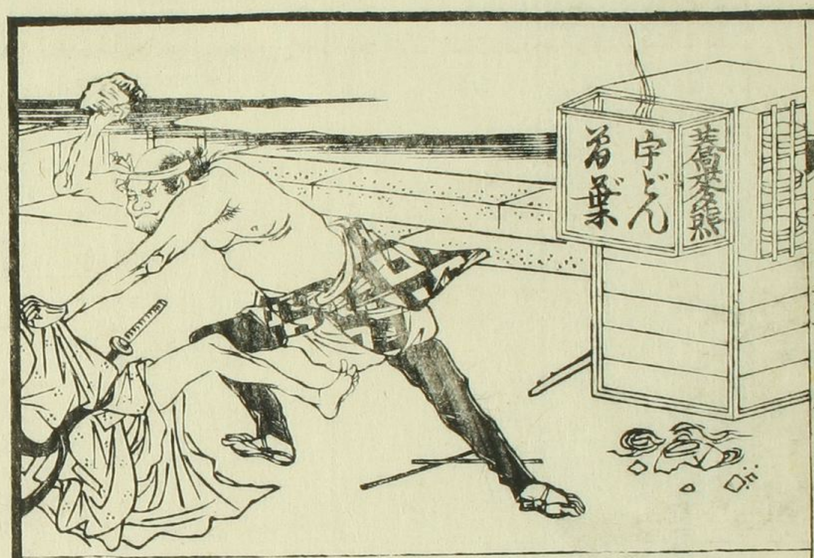
假令下賤の者なりとも國王の其者の德を聞きふて召しめうへやうふなさしめんとおもふ。きふ文化文政の頃日本觀相者中祖水野南北居士といふ人ハ摂州大阪の乾なる下福嶋の産ふして至つて卑賤の者の兒なりし故幼生より悪さ旋びのこみく素未家貧なまべ伊呂波の手習ひさへ得ぶび夏ハ終日大河ふ遊びて

水浴び或ハ小雑喉を漁るの冬ハ一銭夊の賭勝負のど
業と〳〵成長ふ随ひ悪業追〳〵増長ふるよび博奕を常
の業と〳〵酒色ふ耽て酔徒輩街ふ旋び〳〵夜店の国婦ふ
馴染又ハ往来の人と囮詐を常と〳〵人と打擲さ
などと是と心得僕強〳〵肩肘を悍〳〵所の妨とも
成るの悪黨放蕩子なるもの父を亡ひ母と養育の
ふ夜ふ入まハ温飽膏粱などの直商ひ〳〵出とく
ども半宿ハ喧嘩闘諍ふて夜を明すも毎般よて一
個の母と養育ゆるとも不孝此上なきもの〳〵茲ふ因
て十七八歳の頃より九二三歳まで乃内ふ獄牢ふ繋ぎて

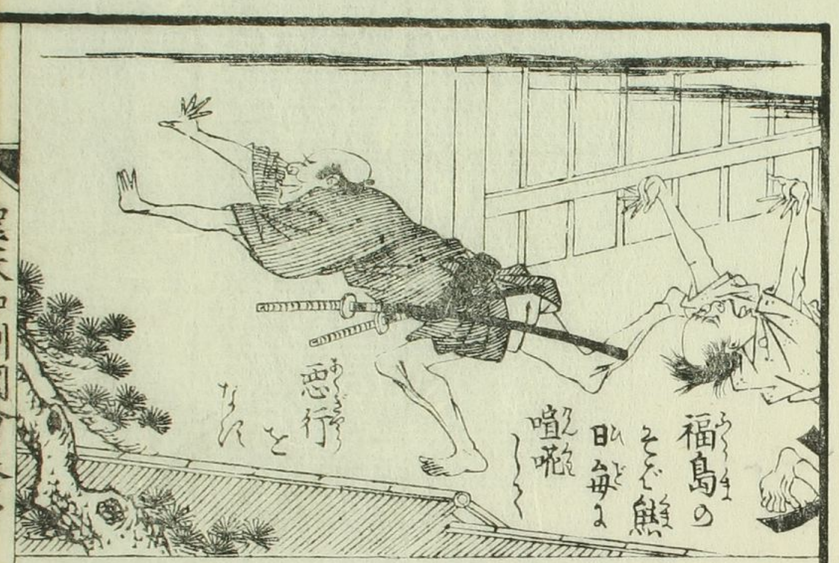
縄縛の薄ゆを蒙ること都て三ヶ度なり其頃ハ福島ふ
蕎麦熊と云〳〵名を聞く〳〵人の忌嫌ひて南北の
牢中ふ居ること時召捕ひを居る罪人どもの人相とを
ら〳〵と観〳〵ふ学び〳〵とくども天然と其死生存亡
と察智すふ支百中ふ一個も違ふ支なく〳〵ふ
於〳〵観相ふ志と頗くふ頻ふて出牢の後當
時大坂都會ふ於〳〵双ぶ者なき観相者の高名ある
間瀬氏ふ始め〳〵往そこ己ぎ観相とびをふ〳〵存命
の手数と問ふふ間瀬氏の賢くも彼ゆ人相容貌と見
〳〵你ゆ骨相ハ至〳〵凶悪ふして然も當時の志ハ勿

論今時の行ひみたい翌明とも知るべき死相なり素来
夭死短命の相〻そなへ毎度ふ命を全くせずして而立前後
ふ限るべし迚も不惑の天寿を保ちがたの凶悪相なり
と示さるゝ蕎麦熊大きふ歎を折角人身ふ生を受るゝ
き来ぬべし夭死短命も甚ぐ残念歎ケ敷万乞長寿を
保つの真法なるべんや希こゞ示し給ふ歎れ
乞ひ願ひ願瀬氏も其望む処実ふ切なるを很て曰く
悪相是則悪相なるべし吉相まゝ吉相なるべし心を以て
相ふ善悪吉凶顕りなるべし你今日より善心ふうへり
偏ふ天尊を崇め信じ慈悲和合の道を主とし今日

より三十五歳までの食分天禄を喰ひ延さば八十歳の
長寿を保んと疑ひ〻ふ来人と諍ふとなれば
鬼ふ角慈悲愛憐を行ひ人と和合の道ふ背うべい天
禄長く八十歳余りの長寿を保べしと懇ふ示され蕎
麦熊忽ふ形骨砕身〻て天尊を信心ふ他念なく
三十五歳迄の間の天食天禄を八十余歳ふ喰延もの
法を習ひ得く日ふ麦一合蚕豆一合を定食とし其余
ば他の恵こ呉るゝも一つの饅頭又ハ餅或ハ一つの菓物を
も無益ふ食すると云へとも天尊ふ誓つて堅く是を
守る凡天地の間ふ生ずる処の物〻大となる小となる



益ふ費へ捨らんとを深く恐れ然ふして天地神佛の冥慮冥加ふ應ずるの理を述示して其身も深く慎み且夕天尊を崇め信ずる支他ふ矣ふして遂ふに聖德皇太子中臣觀相者の大師水野南北居士と名乗りて皇胤貴族諸候亜侯ふ請招ひて観相し奉る其數



知らず在京の日ハ予春々屋と共ふ冥加訓の講話道話を以て人を善誘ひ支多年逐ふ天保六未年九月八十三歳ふて安楽ふ清寂に及ぶ生涯天尊を信念し得て他念なく至つて卑賤の人の子として然も不学文育一字一点さへ知らぬとらひの是の如く高位貴族と膝を

同じく志く終焉の日門前ふ鎗を立双ぶら支數十本ふ打ちびめ嗚呼此人奈何なんぞ斯の如く果報つゝじゝ人となりゝゝや貧窮下賤の家ふ産まれ伊呂波の假名文字さへ知らぬ文育野人の後まへ独経傳書史を訓讀〳〵熟得ふ打ちび皇胤貴族諸侯亜矣と同席同語ふ打ちびとりへ全く悪黨の善人と立復り偏ふ天尊を崇め信ずるの垂一なるを愛愍應護ふよりぶ四へう南北子門人なまとありとへども志行とりふ大人ふ双ぶりの一子もなく〳〵南北子且夕の勤行天尊と崇敬信拜の真切ふて年久〳〵怠らぶるい中〳〵客易の信者の及ぶ処

いゝゝ所謂本文ふ名をとりとゝ宜ふ迂ゝとゝう又我國王を〳〵と呂〳〵ひとりの誓願空〳〵かゝぐゝの所なくべ〳〵眼前ふ公卿諸侯とゝふ天尊を信ぐ〳〵重ね公役を家ら青雲なゝ〳〵武家の人〳〵と見る処毎般なりとへども憚る処なまぐ是ふ畧〳〵べるめ。茲ふまと百五十石積の淡路船の炊ことを務め居〳〵〳〵高田屋嘉兵衛嘉蔵ら兄弟素来家貧ふして一時い漁網曳ふ雇まれへ大坂其外諸国へ通船の水主炊を船中の役ふ雇ひて年月を送て居〳〵ゝゝぐ伏乞立身青雲〳〵責て祖考父母等の吊ひも快よくなゝぐと兄弟身を碎

き骨を粉ふして持ごめうつしゞ一時大坂川口ふ滞船
の後後の寸暇を得て兄弟とともふ急ぎ走りて浦江
村の天尊へ日参して尊前ふ於て亡父母ふ逢がごと
わりかへて信心堅固ふ渇仰ふ及ぶ国ふ帰まべ
其方隅を的ふして信拜する変急なれども一時
大坂ふ来り川口ふ滞船の砌北國ふ當つて芙蓉峯
いと登山して旭を拜ひ始末を兄弟相同じく三夜
續けて夢見ること寄矣のごとく平日視しく
出入る大坂の商家ふ来りて始終を噺しくるふ主
人の曰く傳え聞く此頃西蝦夷の地追く公より御

開地のよしなれば米酒を積込彼地へ販ばゞ過分の
利徳あらん而ふして又彼地より名産の昆布鯡干鰒
などを積帰らば船の往通度毎ふ一廉の高利ならん又
米酒ハ桑ることより送り積込べしこの約定熟話して即
いち七八百石積の船ふ酒米を積込彼地へ販ふ折よく
風波の難もなく彼島へ着船して米酒とりふ大ふふ払底
の時なりとて忽ち賣捌き價も高く過分の利徳を得
なりなれば嘉兵衛兄弟大ふふ歓び海路安難して帰坂
の節まして引つゞき米酒らゞめ彼地ふ於て要用の品をば
積込下して大ふふ利潤を得て追く都合よく船往通

こも商ひの利徳ふ因こ遂ふ自分ふ千石以上積の大船を二三艘まこふ五六艘後ふ十七八艘も造つ〳〵彼地へ往返自由自在ふ商徳利潤を得る支過分ふ〳〵て忽ち大商人となり兵庫の津と大坂とふ自宅を設けて家業繁栄おおこふ上　公より蝦夷地御用を蒙り青雲ふ及ぶも全く天尊を崇め信ずるの利益應験ふよる処なり

子春の屋此嘉蔵と親〳〵交りり此人兄弟の一代記の著述を記ろ〳〵て書〳〵とりむさまり〳〵艱難苦労の話〳〵もいとゞまこふ珍説奇談も多く高田屋兄弟の洋中ふ於てなつ〳〵き船ふ出合ぬんぞふ及ぶ新〳〵なり〳〵ゞ嘉兵衛

兄弟役後文政年中つゞ敷話〳〵もいとゞ是の息男嘉市郎天尊信心の怠り疎略なり〳〵ゆへかくのごと家滅亡ふおよぶりのち慎むべ〳〵怕るべ〳〵の又寒中ふ単衣一重の〻着て衝ふ焼栗を高ふて今日を過〳〵居ころ〳〵極貧の人の天尊を崇信の至誠あるがゆへ不側ふ人の助力ふよつて

取縋り終ふ二十ケ年の間ふ為業作事の図と外さ
ば天下の人氣ふ和合し一廉の豪富と成り居宅い勿
論抱へ屋敷敷ケ所新田別荘まで價ひ得て息男二
個相應の商家と成て活斗有福の身と成し全く
天尊と朝日丹誠を抽んぐ祈念あると生涯怠ざる
の應験のあらぶ処仰ぎ尊まざんべ有べらべ俗ふ取謂
鰯の頭も信心とやり況ん哉是い利益的當ふ見せしめ
る〻処の天尊祈〻歎き奉るふなどゝ應験の好さこと
たゝんや我信心の渇仰の厚さ薄さふ因〻自然と應
験利益の遅速ある事他の佛神ふ百倍〻〻べい其

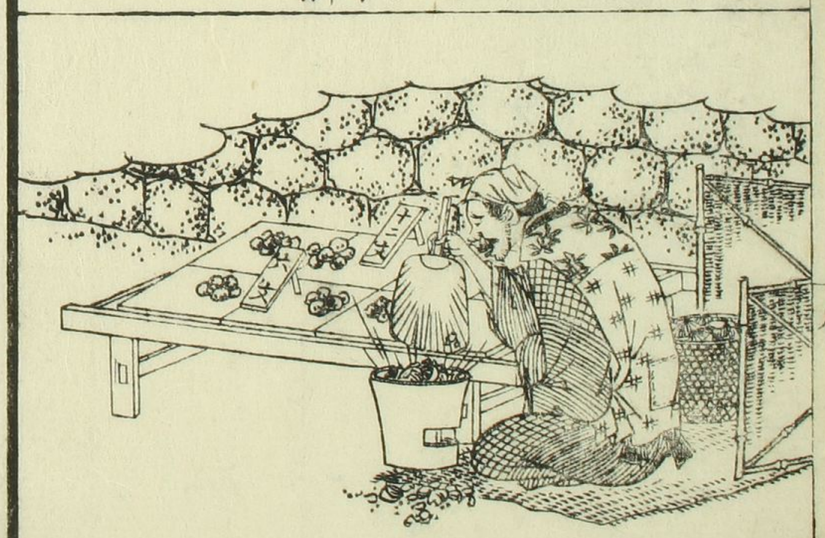
賞罰の速なり怕まつし〻努力信心怠る事なく恭
禮ゆべ霊應あるるの迅的なる事ゆく〻数べべ世〻
高〻んとを願ひ官位昇進し上階ふ迄らんとを我〻
願ふりのたゝべ我国王として乃ち召上さ〻むべし〻と先
づ述べるゞ如く貴族高官大禄ふ昇り迄りとる人
まゝなり是ハ又憚る事のとべまゞべとゞと茲ふい述ず

有求世異寶　使世積珍利
家豊足七珍

世ふ異〻る寶を求むるのなりく其事と我〻願ふ

りのなくべ世界の人とて
珍らしく利徳と積たる
家繁昌するふ黄白沢山
七珍と呼ん七珍といふ所
謂金銀瑠璃琥珀珤璨
瑪瑙璊瑁などの寶とて
然いはまだ黄白赤黒ふ増
さる宝ハなくべくべ

世皆所希有



有求色美者　發願宛然至

世ふ希有とする所の色美しき者といふ黄白を以て
鏤さる所の器りのうまと緋紫などの美しき色の者を
求むる変なくく我ふ其変を願ひと發さば宛然くく
て至くしん心のまくふ得さくしんの誓願なくべく

莫須言遠近　高貴及難易
志心於我者　我使須臾間

有衆生疾苦　顛狂及疥癩
疾毒衆不利　百種害加惱
誦我陀羅尼　無不解脫者

遠く近く高貴わろび難易を言ふべくと莫く心を
我れ志〜なべ須臾の間と〜と衆生ふ疾ひの苦く
顛狂とよび疥癩疾毒衆く利ぶ百種の害ュ脳
こを加ふることなくも我陀羅尼を誦〜あべ解脫を
ろるめあ〜しもべ〜難い難行苦労なり易い安く
たくまれとをれ言ふ及わぬ心を我ふ志〜祈らば我

須臾の間を見て衆生ふ疾の苦こをう顛狂とよび疥
癩疾毒衆く醫薬を用ゐても利ぶ百種の害脳
を加ふることの変わるとも一向一心ふ我陀羅尼を早く
念誦ぶべ諸の災害なくべよ諸惱も解脫ぶる
とつくとをあ〜まもべ〜遠療のくまぐ〜ュ術を尽た
ども功なく治〜難こと難症も忽ちふ平愈あ〜め
假令顛狂わよひ疥癩病の難治の疾病くとも我を
信じ願わば速ふ平愈なくめむ

獨行暗冥處　依我皆無畏

独すがらと夜行き暗冥の処を行ども我陀羅尼を
誦し信心に怠慢なかりせば狐狸却て畏をなして害を
なすことあたはず其人を守護して更に畏るゝことなかりし
○是に越前の藩中にて身分至つて軽き人也し国用
る時江府屋敷より本国へ急飛脚にて帰るとて途中信
州路の深山に踏迷ひ然も夜に入て闇夜なりければ挑
灯の火を借べき人家もなく熊狼の落し穴へ踏外
容易に上り通る事を成がたく無念ながら夜の明るを
待て見れば穴中に澂しの溜り水あつて小さき亀の
二疋居たり旅士は備に國用の遅くなることを歎き

平日信ずる処なれば心中に天尊の陀羅尼を誦し居
たりけるが此亀の穴中へ照込る旭の光映を歓ぐれ
俯向することの度を知らず幾度といふ事なし始めの
程は亀が希有の事をするよと空しく見過て
居たりしが忽ちに我も其意をさとり亀の如くに旭
光に對ひ其陽氣を吸ひ腹中へ納むることを覚へ
得く忽ちに饑を忘れしより是に於て饑を凌ぐ事
を覚へて穴中に日を送り三日なりしかども饑渇
を知らず過しける然れども心中にて須臾も陀羅尼
を誦する事怠らざれば猶も人の来りて助けられ穴中を

出んことを念じ居るうちに
四日目とおもふ未明に猟師の
来りて穴へ何角陥入うり熊
う狼う人〻来らん〻躰に得
物の有〻と歓び罵ると下よ
り聞〻頻るふ声をこうけ〻
否〻我い人なりホ〻の事
あて四日以前の夜中踏外り
陥入うう助け呉らんまと喚
くふ猟師も驚て急ぐ掃子

尊天の信者
陥て落を
助

と下〻と此旅士をたすけと
り此旅士毎度ふ國めとへ
帰ると國用延引の委細
と歎訴あとゝる処家
老公用人等あれふ仍
〻途中なんぎの次第
耳孔〻の上却〻国用
延引の咎めもなく毎度
ふ済〻い全く平日天尊を
信心の應護あらとゝ〻

成べしと云へり信心膽に落ぢまんべく怠る事なら
ざるべし

却賊忽然侵　我皆令自縛

盗賊竊び入て却て忽ちに侵すことなしとも我を平日
に信ずる輩の其陀羅尼を誦ひ我盗賊をして自縛
せしめて退んと示しうへ茲に大坂南船場とやふ住
する商家の妻女親属兄弟に誘はれ終日遊楽して
出て夜遅く帰まで衣服髪の道具櫛笄など
一所に集め大風呂敷に包て夜明ぶに土蔵へ収めんと
枕辺に置らるまゝあそこに其夜中盗賊の竊び
入て彼風呂敷つゝみ物論量寄を打へ衣服黄白
と若干いろあり物を盗て出ると手らべ下人某の眼
覚て主人を密に起しかくと告知らせ其身い貫の
木を携へ追駆出て盗賊の帰る後を慕ふて走りけ
る主人い自若として天命なり驚くに及ばずと忽ち
口漱ぎ燈明を備へ衣服を改め兼て信心渇仰の天尊
を拜して祈願して彼風呂敷包を脊負て
逃走る盗賊の意いを急げども何とて後へ引
戻さるゝの心地あるに向へい往ぐて覚ゆる処へ下人の

彼貫木を盗賊眼がけ〳〵撃附る是ゞ為ふ盗賊ハ
真俯向ふ刃仆まろ〳〵下人手早く風呂敷包こと難
なく取帰り〳〵後日の難をれのがく盗賊ハ其まゝ見遁
し帰り〳〵るとかや是ふ偏ふ天尊の應護ふ因て自縛
なるべきハ処かなり○其後此家の真向ひなる小呉服
屋の妻の病気重く〳〵や死なん晩まや臨終なるべし
とて天満の親元ふ養生有あゞく家内ハ此病婦ニ因
て心配あく〳〵須臾の間も安れ意いなるり〳〵一夜二
更半頃表の入口を叩く者なり下人等早合点ふく
天満より臨終を告知〳〵せふ来る〳〵とと心得遠ひ

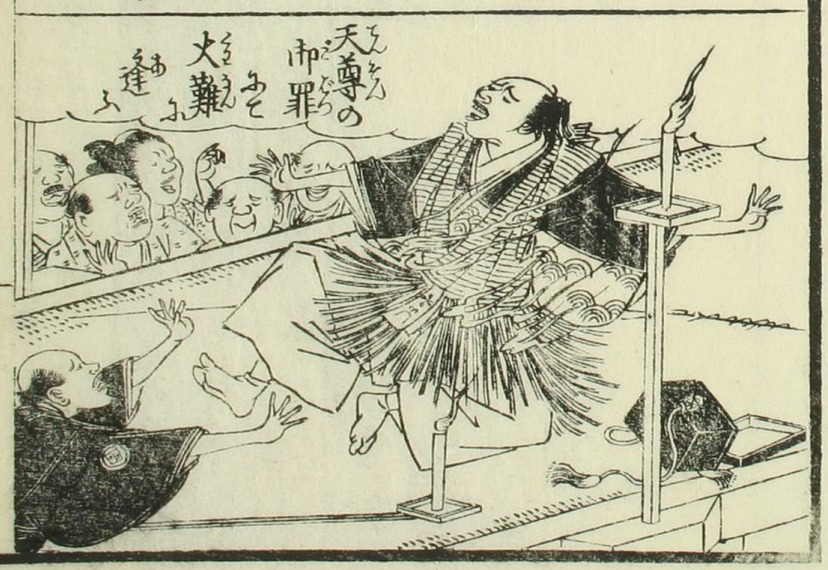
ふて何人も咎もなく入口の戸を明るや否や六七人の
盗賊白刃を振廻〳〵故〳〵店ふ有あゝ貴物の呉服小切
まで残らず奪ひ去る明且店を開く支なるかく俄ふ
裏家へ逼塞有〳〵とゝ後日ふ寄ハ一向宗門ふく向
ひの同宗門ふく〳〵なるあく〳〵天尊を信ずるを見て雑
行なりとて矢ひ誘り蔑如ふ〳〵〳〵かくろとくの神
罰かと人こかを〳〵矢へり信不信の差別現然なる
支茲とのつく知るべし〳〵とゝ○和州郡山とゝやの藩
中何某の旧家の忠功なるを以て殿を度く諫言の
支なり〳〵ども用ひられざるを以く身退き浪人と成

諸國を遍歴なくなりなら処心ふ憔しる主取もの
尾羽打枯し一刀さへ賣代なくなる無力ふてなりる
ば播州姫路城府の北在て縣村とうやふて行らし
らるのめへ正宜の家と覚しき門長居の大家と見掛
て一宿をこらるふ中〳〵断て容易ふ一宿を許ざり
らるがさまざと歎き餘儀なく頼こてやうやふ門長
屋を賃て一宿旦とならるふ任せ夫婦一夜を明しける
然る処ふ丑満も覚しき頃強盗の八人竊び入混家
の男女を残らず縛り府主人一個を助け黄白の在処
を責問るようふて同じく門長屋の側ふ外わる奴

僕の急ぎ彼浪士を起し〳〵告て助けん支と謀るふ浪士
も某もうひ無理ふ一宿を乞て邪居らるふ驕ふ強盗
入来ると有く方一小子が手引ひ〳〵ふ数わるんも残
念至極玄ぬ〳〵不佞ふ〳〵一刀帯居い強盗等と一
戦も活くい帰さぬりのとと歎息〳〵伏乞〳〵て一刀
と得まか〳〵くと謐さけきべ彼僕が又物い主人の居
間の簟笥ふなまべ中〳〵唯今強盗等の混家中〳〵
漫て居まべ取来ると難〳〵奈何いひんと評議の中
浪士の斗らべ一私案なり〳〵彼八人の盗賊等を欺て
誑うて今宵暮早〳〵ようふ竊び闇て同黨等の来る

を相待居る処へ扨の〳〵方ふ前と奪ひ去るべく残念至極なるべく土蔵の中ふ黄白を貯へたる処ハ多年伺ひ考へく能相知るべく不佞かの〳〵方〻案内すべ〳〵ものへども盗賊渡世の業なれば容易ハ如何因〻何わど黄白匿〻なるとも半金ハ我ものなり其後兼諾なるべく案内すべ〳〵との旨双方熟談ふ及び則土蔵の中ふ〳〵の処ふ黄白の匿〻貯へ置〻ふ不佞ハ土蔵の戸口ふ在て人の来らん用心すべしとの約諾ふわるび盗賊等ハ大ひふ喜び間もなく間ふ彼浪士一刀の用備を為〻待るも知らぬ盗賊等黄白

の在処の知れ難を以て尋ふ二階より下ふ来る者と一〻ふ召捕縛て揚げて盗ミ〻品を一品も渡さぬ夜明て村方より追〻姫府の知縣舘へ告訴へけるふより盗賊等ハ姫府へ引き入牢吟味なるふ及ぶ此項市在とも豪家へ踊て迯又ハ壁を穿ちな



と為る強盗を安造作ふ斯易くと召捕へらるゝと
全く浪士の即智の働きなりとて賞誉の上か
る者を召抱へ置べ國の寶なりとて乃ち先主人郡
山侯へ引合済く万緒縣村正宦某ハ亦来此浪士何
某と義兄弟の因こと結び万支を引受を以く浪士
い姫府侯へ新地百五十石を以て召抱へられ正宦も多
年天尊を崇信の切刀ふ因く正〳〵今宵の盗難を道
き却く名士を紹介なゝつゝて領主の賢慮も組
後まれ大正宦を命ぜゝて苗氏帯釵兎詩あるる
〳〵是偏ふ天尊の慈護ゆへ刼賊等の侵〳〵害戍

為ひ忽然と我皆自縛ちむとなる誓願ふ違いざるえ
諍んぐ恭敬渇仰つゝ信心怠ることなるべる者ゆ

若欲自然福　若有求女人
夫心令得女　我必令相愛

〳〵自然の福ひと得んと欲ひ〳〵婦女とりとひら事
なゝべ先其夫の心ふ女と得さゝめたのゞゝ女の方ゝ意
慕ひ来らゝめゝ我必らべ双方とゆふ相愛ちゝめん人
何地の女と吾妻ふ吾嫁ふ迎へ取て夫婦とれら
一生涯と添遂ゝゝ吾其意のおゝ

なるべしとこの御誓願なり

世間陵突者　我悉今摧伏

世間に於て天尊信者を妨げ或い害を為す者あらば我悉く摧伏せしめんとの。たまふ天保の始め中村邑左門と云ふ俳優者のなりをぶ折ふし摂州西宮駅積翠寺の境地に於て天尊の霊堂を艸建の企あり浄瑠璃と興行すべきや歌舞妓狂言を寄進興行を企すべきやあらず院主の色々と評議の処に世話人の中に此やうの儀を至て好む人の有て大坂へ来り村左門に紹介

する人のありて此度と相談ふ相ばらく処村左門の曰く僕儀素来天尊を二信心の儀ゆえ同志のもの斗を一座組合ひ早く〳〵ふ下に狂言興行ふ相ふべし浄瑠璃興行なりとても思召の通り黄白も集る迄歌舞妓は又〳〵格別なり勿論信心にて興行ふ及ぶ儀ふ〳〵相動むべし仍て諸雑用の端の出金を頼むとの相談なへ世話人中の詛らるとの露あらば給金とて羈ふに遂ふ何程金子なりとも衣裳の手ふ入ざる何やどなくとも道具がそろふ又誰彼の身の上相談成ざると途中より

先約と雲泥ふ異じ種くの偽虚言と以て誑られ
遂ふ十日與行寂初壹給金とつふ欺うれて衣裳
質代道具誰彼の身脱ふどうて四十五両余出金ふ
及ぶ是を久耳人毋ふ竊ひ居〳〵此
教陸與行九日目ふ成日の大切打右工門取作事の中
浦嶌の腰裏ふ指出〳〵の火の燃附く忽ち一身大炎の
姿とかう衣裳い勿論頭髪毛まで悉く焼失る
わどの支ゆ〳〵當人い戯場小家中野仆ふ狂り呼び苦
しむ支叫喚大叫喚火熱の地獄の責もかくやと眼も
當られぬ始末なり素来一身ふ火燃あるゆ出桟敷場

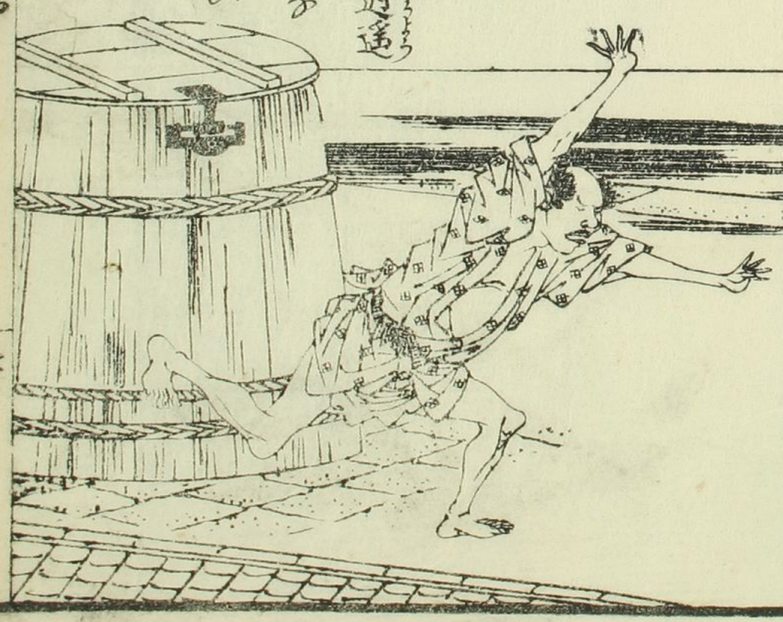
所國り十文字ふ横つ〳〵の木又い高低を厭ひず七轉
八仆して狂ひ野仆打廻り〳〵とゆ〳〵所く撲身摺疵い
勿論一身焦焼痕ふ〳〵水腫ふ成て更ふ正気いかりし
翌日ふ至て〳〵つ〳〵ふ正気ふい成〳〵ども一身痛く疼
き腫痛こ更ふ堪へがた〳〵戸板ふ載て大坂へ送り帰し
医療い勿論生玉南の坊下寺町圓正寺の天堂へ日く
ふ後悔侘を願ひ祈祷と以て半年斗とふて速ふ本
快ふい及べども痕い其侭見懲しめの為暑寒ふい苦み
〳〵とい人を誑り欺くとも神佛を誑り偽支とい
成難〳〵況て人の常〳〵怕きかの〳〵く天尊の支ゆ

尚更の支えて賞罰迅速
なる霊尊かゝゝ実ゝ身知
らゞとゝゝ愚人なり愚案
昧智を以て実験的而ゝ顯
ゝゝゝゝ所ゝ天尊と偽り
欺らんとしてかくの如し
能く素伏して信心怠り
なるべかゝざる者なり

逍遥自快樂

宛然無所之
有念皆称遂
隨有咸満足

心のまゝゝ旋び歩くと逍遥
とゝゝ天尊を信心堅固か
る人ハ心の欲ゝ処ゝ隨ひ
旋び歩くとも自然と
快よく楽しむと深く



宛然として何一心ふ不足なる事無く念ふ事こゝろ称ひ遂る事有り信感あるふ隨ふく願ひ所の事満足ひ所ふの誓ひ所ふ

設衆悪来侵　我使如其意
我悉能加護　任居皆吉慶
宅舍悉清寧　男女得英名
夫妻順和合

設へ衆の悪来りて侵し苦しめる事なりとも多年我を信心する事堅固の行者あらば我其本人の意の如くわれ悉く悪衆を退けて能護をを加へん然らば假令方角又い家相などふ彼是いふ事あるといへども住居こゝろ吉慶を得ひめん宅舍悉く悪魔降伏退散なるべし清く亨かるべん男女とも孝悌忠孝貞烈又い書画和哥連俳などの道ふ於て其の堪能の場ふ至う英名を天下ふ發ひめんと誓言へば大雅堂夫婦のごとく生前い格別人の賞美もあるべし後日増ふ英名高く天下の仰ぎ慕ふと又大いう妻い夫ふよく順ふく家内和順福德繁昌を

得たり〜〜

上品持我者　我與人中王
中品持我者　我與爲帝師
下品持我者　富貴無窮己
恒欲相娛樂　無不充滿足

上品我偈をよく持ち誦する者は我人中王と與たん
中品我偈をよく誦持する者は與に帝師と為る
帝は天下の主師は人教へ導くをいう下品我偈を能

持ち誦する者は富貴竊にして〜〜富といふは黄白家督
山林田地等を多く持つをいう貴といふは高位高爵と
いふ〜位高く官貴く身分の人ふ勝れ福なり〜高
貴なるをいう已に恒ふ娛こ楽と欲ひ願ふて満足し〜
充るをいう美婦と遊び楽むを楽といふ富貴栄耀
此上のあれ娛こ楽まんの幸を得んと更ふすと〜〜

奴婢列成羣　美女満街庭
遊行得自在　隠顯能隨念

出入無所礙

奴ハ下部下人ヲ云ヒ婢ハ侍女下婦ヲ云ヒ各〻列ヲナシテ群ヲナス群ヲ大勢むらがり集めル支なり顔よく容姿ヲ美女街庭ヲ満集り旋行する心のまゝ自由自在を得て形謂中庸ヲ隠まるゝ顕ハ見るゝ微しれる大ハ小なるゝと〻なる如く隠まるゝも顕ハまる支も能く念ヲ処ヲ隨ふゝ出閑ふゝ礙りなる処なく自由自在を得るとの誓願なり

無能測量者　我於三界中

神力得自在

測量ハハカリハカルと文字ヲ上〻天文日月星辰の運旋ヲ地理田地其外一切の數量を測る支をよくする支ハを者なりとも我三界の中といヘて天界地界人界ハ過去現世未来の中ヲ於て神力を以て自在を得ヲの誓願應護ヲ

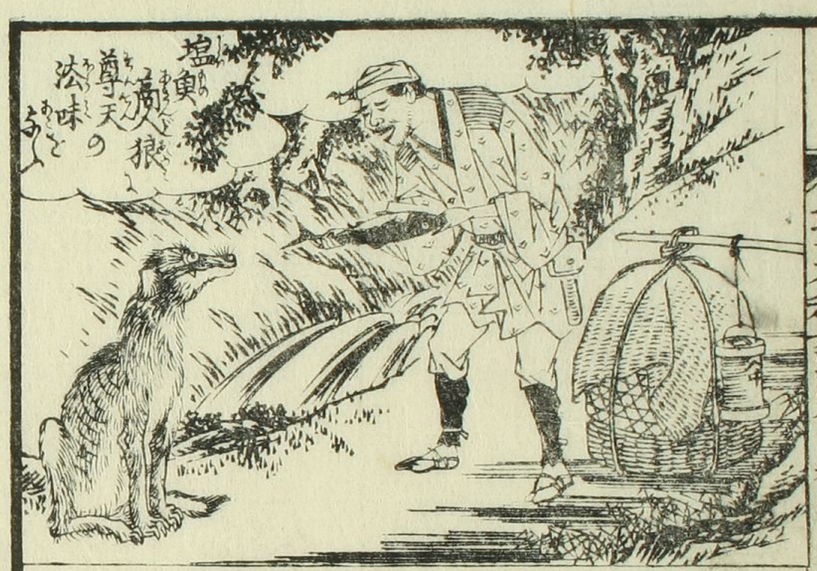
降世希有事　我皆悉所為

若說我所能　窮劫不能盡
世間ふ降ふそ希有の支ゝ有の支ゝ我皆悉く為に所の
若し我能する処と人ふ說聞する支ゝ有の支ゝ其竊めゝ
らん限り却め守護して尽る支能ゝ

持我陀羅尼　我皆現其前
夫妻及眷屬　當隨得衛護
たゝ我陀羅尼と信じ持ち誦するものゝ有ゝ我
ゝの其者のまゝふ現ゝて夫妻いふ及び眷屬ま

でも無量息災家内繁栄高運發達と其者の身分
望ミ願ひふ隨ふ衛り護りと得べし

我有遊行時　誦我即時至
過於險難処　大海及江河
深山險隘処　師子象虎狼
毒蟲諸神難　持我皆安穏
我何地となく旋行する時ゝ我咒と信実に誦
する者ゝ即時ふ其處ふ至りて山路の險難



きこゝ海中風波の難に
江河ふ於くいろゝの難儀
身ふ逼て困しく居るとも
我を尊信ふ及ぶ信者行者
なゝ我忽ちふ其処ふ現ハ
れ至ゝ其當難を救ひ得
させん深山険隘ある処に於
く師子虎象狼なゝの猛獸
ふ遇ひ又いろゝの毒虫の
災ひ諸の悪神の崇り業罰

の難ふ遭ふゝも我咒を持つゝ祈て願ぐ我忽ちに其
聲に應じて現ゝて出ゝ救ひ助け皆安穏なゝめん
との御誓約むゝ〳〵迫る文政の末ゝ子春の屋ゞ知
己ゝ丹州亀府の塩臭屋の京ふ来り或い大坂ふ下て
價の賣上差別利德相應の品を貰求め仕返帰ること毎
般ふゝて短日のとゝい城州丹波両田郷ふる大江坂へ俗に
老の坂ふ帰て来る頃い例も暮年頃ふなゝゝ支あり此男兼
て天尊信心毎二の行者ふて道路を歩むゝ徒に已ゞ
始終天尊の陀羅尼を誦持ゝて他念なゝく一年の冬十
二月の末来春の賣物を仕返に京へ出ゝ処量ゝゞ厚

取て帰路思ひの外迷く成て老の坂と通る頃い彼乞
二更まへなるゝ時道路の側ふ狼の出居て塩魚の腥臭
き匂ひふ附纏ふて奈何ともなるゝ見ふ於て商人
の忽荷を下るゝ人ふ對ふていはく我い京ゝ出てすを毛
の元手銀を以て塩魚と仕廻求め亀府ふ荷ひ販り商
ふて終の利潤を得て混家父母妻子と養ふ処かう今
此塩魚を你が望むふ隨ふゝ與へなば可べうゝん何とぞ
父母妻子と養ふの的と失ふも歎ゝ因ゝ今吾你ゝ
聊かうとも天尊持呪の法味を與ふゝまゝ宜ゝゝ食
ゝて腹を肥すべゝと鯖壱尾ふ天尊の呪と百遍誦ゝ

て與へたるべ狼忽地ふ薄ひ頭を低まて喜び食ゝゝ立
去るる魚賣人もたゝふ於く安堵ゝて家ふ帰りぬ翌
日京より荷ひ帰りるる鰤塩鯛鱈鰯などの存外り
價ひ貴く賣捌け思ひの外ふ商ひふ利徳を得たり魚
賣人も大ゝ歓び是い全く天尊の慈護利益なり
やうゝ処なりと愈有難く日増ふ信心堅固ふ茶敢ふ
わすびるる其後京ふ出ゝ帰路遅き時い必ら老の
坂の岩下ふ出て狼の踞り候わるとゝ小魚一尾
ふ陀羅尼まゝふ呪と誦ゝていと法味と頂戴ひとと與
ふるを例ゝなりゝぶ一年の月迫例のごゝ暮遇此坂

路を帰りける時狼の奥賣人の裾を咬へて道の左へひく支頻りなり奥屋へ何支とも心得ず是い戯れを為す哉と却つて呵る例の如く小奥とゆふとへども狼い其奥ふ眼もかけず奥屋の衣服の裾を咬へ曳く左へよる支いよ〳〵頻りなり奥屋い曳きづると争ふ中ふ狼の奥屋の後へ廻る躯へ前足を掛く飛蒐る矢庭ふ奥屋を往来の左へ倚く忽ち傍向く推付〳〵ふすると山上鳴動して忽ち一つの火魂の焔くと燃く轉び林下の辺へ落去ぬ其音の誠に雷明の如く裏さ此火魂ふ中らば奥屋の即時ふ命を亡ふべうりなる時大ひなる瘢を求むべきの処狼の疾くも此災を知りて かくのごとく魚賣人を救ひ助しあり茲ふ於て魚賣人の狼ふ天災を救いまし〳〵ての眼覚く狼を厚く禮と述て帰らんとする狼の余りふ強く高人ふ前足握られて力と入〳〵ひへるや狼のまへ足の骨を脱て立と

あるこゝに愚弱離と平伏くらんで魚屋大に怒る死脊負く
連帰り醫療をまゝこと養生さるること數日ふ〳〵て〳〵く
全愈を得〳〵〳〵時商人い狼ふ天災を道き一命を救
ひ〳〵思ひ〳〵て彼が唇黄相應の食物を添てもと
の山路へ送り帰〳〵る全く天尊の守護利益と以て
火の魂の災難を助けられ〳〵應報の善因うや此奥屋
追〳〵ふ責先得意の手廣く賣掛ふ〳〵の損毛もなく
急〳〵〳〵朝夕天尊と茶拜持誦の奇特ふ〳〵家業
出精の徳〳〵や亀府一家の奥賣人と成て下人ふ者ふ
どを多く召遣ひ商賣手廣く家まさり〳〵繁昌〳〵又

母妻病長命夫婦眷属一同ふ和合子孫長久ふ及び
〳〵〳〵偏ふ天尊信心毒二の徳行よ〳〵る処なれば誠で
恭拜怠ることなくべ〳〵るものなり猪熊狼の猛獣えも
かくの如〳〵其余の毒虫の災ひ諸の悪神疫病神の
祟を難と蒙る夏天尊行者の身ふ於ては更ゝなる
夏なり若〳〵行者の身とゝて是ホの災禍あるべ其人
の信心の足ざる所ふ又意得とゝる処の天尊の神慮ふ
應せざるべふ怕き慎み〳〵偏ふ仁義五常の道と忘
れば和合の大本を堅く相守るべさるのみうゝ尓〳〵て天
尊の神慮ふ應ぜあべ都て此使哭法経ふ忘説偽談の

なるべくべく信心恭拜怠るべくべくるものなり

若有侵嬈者　頭破作七分

前文の如く大慈大悲の利益擁護ふ若背き逆らひ侵し其人の信念を嬈さむるの悪魔神あらば我忽ち頭を撃破り七分と作し微塵ふ罰し罪して亡さん

壽命悉長遠　福禄自遷至

妖魔悪鬼神のさまざまの障碍をなす天尊行者の信心真念を侵し嬈えんと為るとも信心堅固あらば

微しも毒病息災ありて長寿なる支障ひなく福禄よて黄白衣裳などの充満なるを福といふ食物不自由かく山林田地家督十分なるを禄といふ福禄とりふたのれが心のまま自由自在を得べく扨のべべ万福長者の位域ふ迄て至るべし

爾時毗那夜羅迦説是偈已告世人言。説處世。陀羅尼法最護衆生隨其所願皆得満足當須日夜誦持満十万遍乃至二十萬遍皆得如所説即

昇虛空即說咒曰

時ふ毗那夜羅迦十一面觀音是偈を說て已ふ世の人言く

世〻說く處の陀羅尼最も天尊信心の行者を護る

其願ふ所ふ隨て皆滿足を得さしむ當ふ須く日夜

ふ陀羅尼を信心し〻堅固ふ誦持すべき支十方遍乃至

六十方遍ふ滿なべきを說く処の如き利益應護を得

さしめんと示して即虛空ふ昇り即咒を說て曰く

曩牟毗那夜迦上音寫訶悉知目佉上音寫怛姪佗三

阿智耶那智耶吾五姝皤帝耶。六烏悉曇二合迦耶七

悉婆二合拖鉢耶八婆達薩寫耶九婆唎跋遲十蹉訶

此真言勿論秘密〻〻說べし〻〻と雖尚まと以下真言

のく畏ふべ說ず覽者よ深〻〻取捨あるべし

大聖歡喜天使咒法經

大聖歡喜天霊驗經和訓圖會卷中終

罪を録 麤乃艸分なるといふ書ふ天尊利益應驗の
委くさとは迦葉きび出と合ヒ後ニく拜讀ら及ぶ
去れば ゝ殺生不仁 驕慢我慢 華奢美麗 美
食強飲 淫惑邪婬 貪欲恪惜 巧言妄語 陰謀
惡企 不忠不孝 不慈不貞 是ゝ乃不悖隨弱ら
天尊乃深く恭ふ忘まう及ぶ行者ヒふらまを
慎こう人ゝ〻〻 本文條ゝふ迷ふ〻〻 知合知乃
道と忘まび鬼角乃事も如法柔和ゝて信心修
行乃輩ハ郭ふ処乃悲く成就満足なら事数ひ

ゆく現在ふ利益を得〻〻 有心有力乃長者と天下
乃人〻眼を驚〻〻ふの信者今ゆ〻〻ものを見く
為天ゝの霊驗迅速的當なるを仰ぎ敬べし
宜〻〻 女文乃めく威徳乃ふ〻ふる支を感服し
て信心急ぐ〻〻ば我他羅尼を持誦ば共皆ら
愈ら現ら〻て利益を優をふんと示〻〻ゝえば
朝ら春天尊乃兄と持誦し如法ふる重すべき事
なゝすもふ〻も陀羅尼我慢乃ふを生ばゞ〻〻
努〻〻眼ふお乃利益を見く〻心晴く〻〻天る乃藥
忘ひゝ乃処と崇を怪まば〻て四恩乃報へる〻和

会ずるを得ざる者は伝ぞ應機利益を加へず
ゆゑや此和訳弘通の首題とくゝ教味はかりて
返すがへも四名清浄なれば大意大悲の度
大無辺の利益を蒙る事如何ばかりなるべき
此大秘密の要法なり中〳〵予が如き愚蒙迷昏の
和訳する知よりなれば〳〵きゝ有徳知識の法
印ふ勝行〳〵を温奥の大旨とはるべしと云云

安政二年卯初秋　洛東　春全識月舟塔和述